

聖書：ローマ 8：26～28

説教題：すべてを働かせて益と

日時：2015年11月29日（朝拝）

パウロはローマ書 8 章で、イエス・キリストを信じて神の子どもとされた者たちの素晴らしい特権と祝福について語っています。クリスチャンの救いの絶対的確かさについて歌っています。しかしこのことはキリスト者の生活はもうバラ色であるということの意味しません。むしろ 17 節で彼は、神の子どもたちは今、苦難の中にあると述べました。しかしその苦難はやがての栄光に至るための通路である。私たちの主イエス様も苦難の道を通って栄光へ入られました。ですからキリストに従う者たちも同じなのです。さてパウロは、今は苦しみの中にある読者たちを励ますための真理を 18 節から語っています。まず彼が語ったことは、「今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りない」（18 節）ということです。すなわち将来の栄光の大きさと比較することです。世界の被造物も最後の栄光の日を熱心に待ち望んでうめいている。その彼らとともに将来をしっかりと見つめるなら、今の苦しみは取るに足りないということでした。

今日の 26 節以降ではさらに 2 つの励ましが語られています。まず一つ目は御霊なる神の助けです。26 節に「御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。」とあります。ここに「弱い私たち」と書かれています。私たちは色々な意味で弱さを覚えています。聖書のメッセージを聞いて心燃やされ、さあここに立って歩もう！と新しく決心しても、それでうまく行くかということ、そうではない。心も体も充実している時は物事を肯定的にとらえて前進できるかもしれませんが、健康を崩せば生活のあらゆる面に支障が出ます。また心もある時は元気でも、ある時は突然落ち込みます。何か特別な問題があるわけでもなく、朝起きた時に心がどんより曇っていて気が湧いて来ないということもあります。しかしここに御霊が弱い私たちを助けて下さるとあります。この「助ける」と訳されている言葉は、ギリシャ語では三つの言葉が組み合わされた言葉で、その三つとは「ともに」と「～に代わって」と「担う」という言葉です。つまり聖霊は私たちのそばにいて、私の重い荷物を一緒に担って下さる。たとえば重いテーブルを運ぶ時、一人でこれを移動させようとしたら大変ですが、誰かがそばに来てテーブルの反対側を一緒に持ってくれたら私たちは随分楽になります。それまでよりずっと容易にそのテーブルを運んだり、動かすことができます。聖霊はそのように私たちのそばで、私たちの重い荷物を共に担って助けて下さるのです。

その御霊の助けとして特に取り上げられているのは祈りにおける助けです。26 節の 2 行目に「私たちはどのように祈ったらよいかわからないのですが」とあります。ここに私たちの弱さが最も顕著に現れています。本来、祈りは弱い私たちに与えられた特別な恵みの手段です。私たちは祈りを通して力強い神に頼って歩むことができます。ですから弱い私たちはこれを大いに活用

すべきです。こんな素晴らしい約束も与えられています。「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。」ところがどうでしょう。いざ祈ろうとしても何を祈ったら良いのか分からない。どのように神に願い求めれば良いのか分からない。これは突き詰めれば神の御心が分からないということです。たとえば皆さんは自分にとって祈るべき一番の課題は何かを知っているでしょうか。それが分かっているなら、それを一生懸命祈れば良い。しかし良く考えてみると、それが何なのか良く分からない。健康が守られるようにとか、仕事があまく行くようにとか、あの人との関係があまく行くようになどと私たちは祈ります。しかしそれが祈るべき一番のことなのか。おそらくそうではないだろうということは分かります。そう考えると私たちは毎日の祈りにおいて自分に最も必要なことを祈っていないのかもしれないと思わされます。せつかく祈りという手段が与えられているのに有効活用できていない。

またある問題にぶつかった時も、どう祈ったら良いか分からないという現実と直面します。私たちは通常、まずはその問題が取り去られるようにと祈ります。病気にかかれば癒されるようにと祈ります。しかしなかなかその祈りが聞かれない場合があります。その時、どう祈ったら良いのでしょうか。この問題を取り去って下さいと祈るべきなのか、それとも問題はそのままでもこれに耐える力を与えて下さいと祈るべきなのか。私たちは神の御心を見通すことができないので、正確な祈りができないのです。そのために祈りの言葉が出て来なくなる。

またあまりにもショックな出来事にぶつかって祈れないという場合もあります。祈るべきだと分かっているのに、ぼう然としてしまっただけで祈る気力もない。ただ途方に暮れて「助けて下さい」という言葉を繰り返すことしかできない。もっと祈りたい、そして力を受けたいと思うのに続かない。そういうことがあるのではないのでしょうか。

しかしそんな私たちに対する素晴らしい真理がここにあります。26節後半に「御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいませ。」とあります。御霊ご自身がうめくとはどういう意味でしょうか。これは御霊が私たちの重荷を分かち担ってくださるということでしょう。御霊は私たちが何を祈ったら良いのか分からずにうめいている時に、「何だ、そんなことも分からないのか。こう祈れば良いのだ！」とあっさりとりなすのではなく、私たちの重荷を担い運んで下さる方として、うめきを共にして下さる。そればかりではありません。御霊はそのうめきを共にする中で私たちに一番必要なこと、神の御心にかなうことを祈って下さるのです！27節に「人間の心を探り窮める方は、御霊の思いが何かを良く知っておられます。なぜなら、御霊は、神のみこころに従って、聖徒のためにとりなしをして下さるからです。」とあります。ここに御霊と父なる神との間には深い一致のあることが語られています。神は私たちの心を探られる方として、私たちの内に住んでいる御霊の思いを良く知っていますし、一方の御霊は神の御心に従ってとりなしをしておられます。その御霊が私たちのために神の御心にかなう完全なとりなしをしておられて、神はその御霊の思いを知って、その祈りに答えてくださる。

ここに私たちにとっての素晴らしい慰めがあるのではないのでしょうか。私たちがもし祈りにおいて言葉に詰まったり、ウーとうめくだけで、言葉にならない状態にあったとしても、希望があります。すなわち御霊が私たちのためにとりなしてくださる。もちろんだからと言って、私たちが祈らなくても良いということにはなりません。私たちは祈りなさいと言われていたのですから祈ります。しかし私たちの弱さが最も端的に現れるその場面で、御霊がこのように私たちを助けてくださるのです。

これは私たちの祈りの生活に何と大きな励ましと力を与えるものでしょうか。ですから私たちは祈る時、一人で祈っているように思ってはダメなのです。聖霊が共にいてとりなして下さっていると覚えるべきです。たとえそこで自分として満足する祈りがささげられなくても大丈夫。内に住む御霊が、ともにうめきつつ、神の御心に完全に一致した祈りをささげてくださり、その祈りを神は聞いてくださるからです。私は一人でやがての栄光に向かう歩みを進めているのではないのです。助け主が最後の贖いの日に至るまで、このように私たちの内にあって支えて下さるのです。このことを感謝し、心から喜んで、私たちは一層心を強くし、御霊とともに神に祈る歩みへ励まされて行くべきではないのでしょうか。

2つ目にパウロが語っている励ましの真理は 28 節です。「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。」 今日はこの節の半分までをお話させて頂き、来週、残りの部分から 30 節までを見たいと思います。まず考えたいことは、これはどんな状況にある人が告白する言葉かということです。しばしばこの御言葉は、良い結果へと導かれた人が、それまでの導きを振り返って、神はすべてのことを働かせて益としてくださったと証しする際に用いられます。もちろんそのように使われても良いのですが、これは本来は苦難のただ中にある人が告白する言葉です。まだ良い結果を何も見ていない人が、それでも神はここからすべてのことを働かせて益としてくださることを私は知っています！と告白する言葉です。そこにこの御言葉の力は体験されるのです。

さて、ここで言われている「益」とはどのようなことを指すのでしょうか。私たちは色々な益を考えます。健康が守られること、楽しいこと嬉しいことが一杯あること、収入が増えて生活が安定すること、社会的な地位が上がること、自分が願う、取り組んでいることが成功すること、…。しかしここで言う「益」は、私たちが考える益ではなく、神から見て益と判断されることと言えます。そして神から見て益と判断されることとは、神が私たちを導こうとしている最終目標と関係するはずで、その最終目標とは来週見る 29 節の言葉で言えば、私たちが御子の姿に似る者となることです。私たちがいよいよ聖められて、御国に住むにふさわしい者へと造り変えられて行くことです。そのために神は私たちの目には悪と見えることさえも用いることを私たちは考えに入れなければなりません。

もし私たちが願うような益ばかりが私の生活に起こったらどうでしょうか。私たちは聖く変

わるでしょうか。おそらくそうはならないでしょう。むしろ私たちは高慢になり、神はもう必要ない、自分は神に頼らなくても十分やっていけると誤った自信を持つようになるに違いありません。従ってそういう私たちが聖められ、訓練されるためにはどうしても試練や苦しみや逆境が必要になるのです。その中で私たちは自分が思っていたほど、理想的な人間ではないことを知らされます。へりくだらせられ、仰ぐべき方を仰いで、真の祝福の道を行くように仕向けられるのです。5章3～4節：「そればかりではなく、患難さえも喜んでいきます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。」ヤコブ1章2～4節：「私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。信仰がためされると忍耐が生じるということを、あなたがたは知っているからです。その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは、何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となります。」

しかも今日の御言葉には「すべてのことを働かせて」とあることに注目したいと思います。この「すべて」とは文字通り「すべて」です。様々な災難や他の人が私にした悪も含まれます。また私自身が犯した失敗、私の罪さえ含まれます。このように言うところある人は、「では私たちは何をしても良いのではないか。結局は神によって私の益となるように用いられるのだから。」と言うかもしれません。しかしそのように言う人は厳しい懲らしめを覚悟しなければなりません。親は子どもが悪を行なったら、その道には進んでならないことをはっきり教えるために懲らしめを与えます。同じように神は私たちが御子の姿に似る者に造り変えようとしているのですから、それとは反対の道に私たちが進むなら、二度とその道には進みたくなくなるような厳しい鞭を与えるに違いありません。その手段として神は大変な病気を与えるかもしれません。それまでの祝福や喜びを取り去ってしまうかもしれません。神を求める以外には何の望みもない状況に投げ込まれるかもしれません。そういう経験をしていてもいいなら、覚悟の上でその道に進めば良い。しかし今ここで心に留めたいことは、たとえ自分の罪のために不幸をもたらしたとしても、悔い改める私たちにはなお希望があるということです。なぜなら神は「すべてのこと」を働かせて益として下さるからです。私にとって悪になることは一つもこの世にないのです。神はすべてのことを、ただ私の益につながるように調整し、導いてくださるのです。私の人生に無駄なことや意味のないことは一つもないのです。

私たちはこのことを信じて心を強くすべきではないでしょうか。私たちは日々、一人で歩み、一人で戦っているわけではありません。御霊が私たちと共にいて私のためにとりなし、神の御心に完全にかなう祈りをささげて下さっています。またその祈りを聞かれる神は、私たちの目には全く不思議な仕方です。すべてのことを働かせて、私たちの益となるように導いて下さっています。ですから私たちはあらゆる苦しみや困難を前にしても、心かき乱される必要はない。怒りっぽくならなくて良い。焦らなくて良い。むしろ恵み深い神がすべてを支配し、導いて下さっていることを信じて、神に従う道を進んで行けば良いのです。「神はすべてのことを働かせて私の益とし

てくださる。私はそのことを知っています。」と感謝して告白しつつ。